

「西南学院のファンダメンタルズ」

小林 洋一

この度は、「西南学院百年史」編纂に多大なる興味と関心をもたれ、このようなシンポジウムを発案・企画してくださいました、西南学院高等学校同窓会輝西会会長および同窓会の皆さまに心から感謝を申し上げます。この企画は、私たち百年史の執筆、編纂、監修に携わる者にとりまして、大きな励まし・モラルサポートになりました。

ご存知のように、来年、西南学院は創立百周年を迎えます。今回は、その創立に鑑み、西南学院が一つの学校として成立するためのファンダメンタルズ（決定的必要事項）を、どのように決めていったのかを振り返ってみたいと思います。

学校が成立するためには、当然ながら、生徒・学生、教師、校地、校舎等も不可欠な要素です。しかし、ここでは、西南学院を西南学院たらしめたファンダメンタルズについて取り上げたいと思います。そのような場合、校名、校章、校歌、校訓等が、それに当るのではないかと思います。

ついでながら、申し加えますと、西南学院史を編む際の、歴史記述のファンダメンタルズは何かと考えますと、それは、歴史の選択と解釈のための、皆さまもよくご存知の、5つのWと1つのH、即ち、What、Where、When、Who、Why、Howです。私たち、編纂・監修委員会では、この5W1Hに留意しつつ、歴史的記述の点検を試みているのですが、これが意外と困難で、その多くは、欠けたパズルを探し出すような忍耐を要する作業となっています。

なぜ、私たちは、学院の過去を、その歴史を、苦勞して記述し残そうとしているのでしょうか。それは、一言で言って、「西南学院の現在・未来のために」、だと言えます。

私が学んでおりますヘブライ語聖書（旧約聖書）では、未来のことを「アハル」と言います。この「アハル」の意味は、「後ろ」です。即ち、未来は後ろにある、と言うことです。ですから、人は、未来に向かって後ろ向きで進んでいる、と言うことができると思います。未来は、私たちの後ろにあって見えていません。しかし、過去は、



校名などのファンダメンタルズを語る小林先生
(写真協力：西南学院高等学校同窓会「輝西会」)

私たちの眼前に広がり見えています。その意味で、私たちは、眼前に広がる過去を見つめながら、見えない未来に向かって後ろ向きに進んでいくことになります。そのときに、私たちの見えない未来にとって、見えている過去を、陽の部分、陰の部分を含めて、いかに正しく見定めうるかが重要となります。私たちが編んでおります「西南学院百年史」が、西南学院の現在と未来のために、その過去を正しく見定める一助となれば幸いです。

前置きはこれくらいにして、早速、学校が成立するためのファンダメンタルズに入っていきたいと思います。時系列に取り上げますので、まずは校名です。

1. 校名について（創立前）

「西南学院」の校名を定めたのは、学校創立のために集まっていた米国南部バプテスト連盟在日宣教団です。1915年5月6日、学校創立のために招集された在日宣教団会議は、校名を人名を冠した「ウィリングハム・メモリアル・スクール」(Willingham Memorial School)ではなく、地域名に基づく「西南学院」(Southwestern Academy)と決定しました。

校名として採用されかけた、C.T.ウィリングハム(1879-1918)は、南部バプテスト連盟外国伝道局総主事R.J.ウィリングハムの子息で、福岡、北九州で伝道活動をした人です。人望が厚かったので、校名の候補に挙がったのでしょう。

C.T.ウィリングハムは、C.K.ドージャー(西南学院の創立者)の来日にも深い関係をもっていました。ドージャーが、南部バプテスト神学校(ケンタッキー州レイビル市)の神学生時代、宣教師となる決心をしたとき、たまたま休暇帰米中のウィリングハムと出会い、日本伝道への参加を強く勧められています。もしウィリングハムの勧めがなければ、ドージャーは…(歴史に「もし」はありません)。

「ウィリングハム・メモリアル・スクール」は、宣教団会議によって、校名としては採用されませんでした。宣教師の仲間内では、しばらくその名が使用されました。

それでは、なぜ「西南学院」となったのでしょうか。「百年史」編纂の重要な参考資料となっている『西南学院七十年史』(以下『七十年史』)は、学院内には、その由来を知るための十分な資料がないとしつつも、校名決定にいたる素地となったいくつかの興味深い要素を紹介しています。それは概ね以下のようなものです。



C.T.ウィリングハム

- (1) 1873（明治6）年の文部省布達第48号によれば、学校名は、学校の地名、人名に基づく命名が可能でした。—その点から言えば、たとえば、先に挙げた、「ウィリングハム・メモリアル・スクール」は人名を使っていますので、よいことになります。私が勝手に考えますと、地名を使った「福岡バプテスト学院」とか、「福岡クリスチャン学院」などもよいことになります。
- (2) 九州には、当時、すでに地名を用いた学校がありました。鎮西学院（1881（明治14）年、長崎、メソジスト）、福岡女学院（1885（明治18）年、福岡、メソジスト）、そして九州学院（1911（明治44）年、熊本、ルーテル）です。—バプテストは、九州における教育事業において、他派に遅れをとっていました。
- (3) 九州と沖縄を指す言葉として古くは、「鎮西南嶋」あるいは「西国南嶋」がありました。九州・沖縄地方は、省略形として「西南地方」または「西南地域」と言われたりもしました。また、いわゆる1877（明治10）年の「西南の役」も、鹿児島だけではなく、九州全域で起った反乱を意味しました。これらを踏まえて、「西南」は、九州を示すものとして使うことが可能でした。
- (4) 西南学院を産み出す母体となった南部バプテストは、1903（明治36）年以來、自分たちを「西南部会」と名乗っていました。
- (5) ある教師の提言として、日本の基督教教育を分担して負うとして、東北の東北学院（1886年）、関西の関西学院（1889年）に対して、九州の西南学院にしては、という提案がありました。

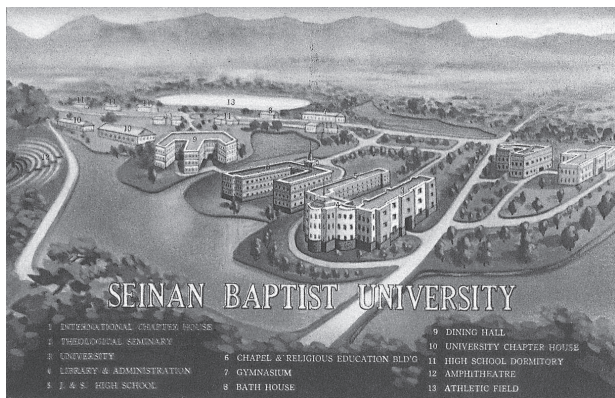
今回の確認：南部バプテスト連盟の報告書である *The Baptist Convention 1860-1940* のドージャーの証言に、その一教師が誰であるかの確認をえました。その証言は次のようなものです。「私たちは、西部組合に属する諸教会、宣教師の友人たちに校名の提案をお願いしました。西南学院という名前は、学校開設の前に日本に戻られたジョン H. ロウの提案でございます。彼の提案は、仙台に東北学院、神戸に関西学院があるから、西南学院と名付ければ、日本の北東から南西にキリスト教主義学校という鎖が完成する、というものでした。創立委員会は、喜んでこの名前を採用しました。』



J.H.ロウ
(John Hasford Rowe : 1881-1976)
小倉で伝道、西南女学院を創立

1. 瀬戸毅義『日本のC.K.ドージャー』（2002）、p.55.

ついでながら、ここで、後に、校名に「バプテスト」のつく大学構想があったことも紹介しておきたいと思います。それは新たに取得した旧干隈校地（福岡市城南区干隈）での壮大なキャンパス構想でしたが、その後のアジア・太平洋戦争という事態の中で幻に終わり実現には至りませんでした。その絵図が残っています。



西南学院バプテスト大学の構想（1937年）

それに、校名の「バプテスト」ということでは、西南学院専門学校英文科卒業生（1950年）が、現大学博物館門前で撮った写真には「SEINAN BAPTIST COLLEGE」の看板がかかっているのが見えます。この英語による校名は、宣教師たちが「西南学院専門学校」を、外国人に説明するために便宜的にそう呼んでいたものだったのかもしれない。



「SEINAN BAPTIST COLLEGE」の看板が見える

2. 校章について（多分、創立前）

『七十年史』には、「誰がいつ発案したのか判然としない。ただ数人の人の記憶ではドージャーの発案という」とあります。

今回の確認：The Baptist Convention 1860-1940 に、ドージャーの証言が残っていました。「私は、学校の校章となるモノグラム（組み合わせ文字）のひながたを描きました。」²その校章は、Southwestern Academy の S. W. A. を組み合わせたものです。

これは、戦時下にあつて、英字が使えなくなり、「三葉の松葉」となりました。

「校名」のところで、校名の候補として「福岡バプテスト学院」や「福岡クリスチャン学院」について言及しましたが、戦時下では、校章の S. W. A. を松葉模様に変更しなければならなかったくらいですので、英語の入った校名は、当然改名の憂き目に遭うことになったことでしょう³。



西南学院校章



中学校の旧校章

◎ 西南学院中学校創立：1916（大正5）年2月15日

3. 校歌について（創立から5年後）

校歌は、1921年に完成しました。

- (1) 作詞者は、水町義夫（当時32歳、英語教師、第4代院長）です。彼はドージャー院長からの依頼を受け、中学部第1回卒業式に間に合うようにと作詞しました。

作詞者自身の証言によれば、「ヨハネ第一の手紙」と鳥崎藤村からヒントを得て、3週間で仕上げたとのことです。「子等・光明・生命・愛・永遠」など、すべて「ヨハネ第一の手紙」からの引用です。第1節に見られる「希



水町義夫

2. *ibid.*

3. 戦時下でのキリスト教学校の校名の変更では、東洋英和女学校が「東洋永和学校」に、フェリス和英女学校が「横浜山手女学校」に変更され、校名から「英」や横文字が消された例がある。

望・若さ」などは、藤村のロマンティックな精神の反映とのことです。

- (2) 作曲は島崎赤太郎（1874-1933）です。当時福岡バプテスト教会員であった東京音楽学校（東京芸術大学）の、不破ヒサ子という女学生を通して、キリスト者であった東京音楽学校教授の島崎赤太郎に作曲が依頼されました。島崎は、日本最初のオルガニスト、文部省編纂唱歌の編集委員長、日本教育音楽協会理事長を歴任し、立教大学校歌や旧制第一高等学校の全寮寮歌などの作曲も手がけた人です。



島崎赤太郎

- (3) 『七十年史』の記載によれば、1921年3月9日に、中学校の第1回卒業式があり、校歌が宣教師 S. F. フルジュム（Fulghum）の指揮のもとで初めて歌われた、とされています。しかし、今回、残存する卒業式の式次第を調べたところ、そこには、校歌斉唱の文字が見当たりませんでした。また、卒業式を報じた新聞記事にも見当たりませんでした。校歌は卒業式に間に合わなかったのか、目下調査中です。

4. 校訓について（創立から10数年後）

校訓（スクールモットー）は、創立前あるいは創立直後ではなく、かなりの時間を要して成立しています。校名の決定の際に名前をあげた、東北学院や関西学院においてもその事情は同じようです。

(1) 東北学院の校訓

東北学院の校訓、“Life, Light and Love for the World”は、大学設置50周年（1999年）を記念して制定されています。第二代院長の D. B. シュネーダーが、日本基督教会東北中会の機関紙『神と人』第17号（1923年）に寄稿した「生命（いのち）、光明（ひかり）、愛」と題した説教に基づいて作られたものです。それ以来、東北学院を象徴する「3L 精神」として受け継がれています。

(2) 関西学院の校訓

関西学院の校訓、“Mastery for Service”（奉仕のための練達）は、1912年に、第4代院長 J. L. ベーツが高等学部長に就任した際に提唱したもので、その後、関西学院全体の校訓になりました。

(3) 西南学院の校訓

西南学院の校訓、“Seinan, Be True to Christ”（西南よ、キリストに忠実なれ）は、創立者ドージャーが死の床で妻のモードに語った遺訓に基づくものです（1933年5月31日逝去、54歳）。



ドージャーとモードの写真

【1933年6月5日、ドージャーの妻モードがミッション・ボードのマッドレーに宛てた手紙の一部】

Repeatedly in recent weeks Mr. Dozier had said, “My life has been imperfect, but I have tried to be faithful.” “I am only a sinner saved by Grace.” The last request he made to the school that he loved more than his own life was, “Tell Seinan Gakuin to be true to Christ.”

この、「西南よ、キリストに忠実なれ」が、どのようにして校訓と決められたのかについては、『西南学院新聞』等から、その経緯を見ることができます。

- * 『西南学院新聞』第14号（1935.11.12）（創立19年後、ドージャー没後2年）
「誠に慶賀すべしドウヂャー記念事業の進展」（無署名記事）

「…『西南よ、キリストに忠実なれ』とのあの言葉こそ我等学院に学びし者のすべてのものの耳朶に刻みつけられ永久に忘るることの出来ざるものである。…」

死後2年後にあって、「西南よ、キリストに忠実なれ」の遺訓が、すでに一定の重みをなしていることがわかります。

- * 『西南学院新聞』第18号（1936.5.11）（創立20年後、ドージャー没後3年）
「創立二十周年に際し創立者の精神を想ふ」（無署名記事）

「…故創立者の教育理想といへば、それは説くまでもなく、基督の精神による教育である。…学院への遺託が、『西南よ、キリストに忠実なれ』の数語であった…」

- * 『西南学院新聞』第40号（1940.6.5）（創立24年後、ドージャー没後7年）
特輯「学院創立の面影」（編集部）

「…今日、創立時の精神は段々と薄らぎつつある…現在の学生は決して西南スピリットをして失はしてはならない、…強く創立の精神を生かすことこそ重大な事業ではあるまいか。…『西南よ、キリストに忠実なれ』…の一言こそ学院に関係する者は誰もが深く味ははねばならぬ言葉でなかろうか。」

- * 1941年5月13日「西南学院創立25周年祝賀晩餐会」席上感話（創立25年後、ドージャー没後8年）於：西南会館

出席者波多野培根メモ「建学の精神及び過去廿五年の回顧」ドージャー院長の遺言

1. It is our purpose to make a good school, not a big one.
2. Seinan, be true to Christ.

- * 1949年（創立33年後、ドージャー没後16年）以降は、『学生便覧』の「大学の設立趣旨及び沿革」に、建学の精神として、この遺訓が取り上げられるようになります。

このようにみてきますと、校訓の成立に関しては、次のようなことが言えると思います。

- (a) 創立者の遺訓なので、最初からそれ相応の重みがあった。
- (b) 繰り返し使用されることで、人々の支持を集め、校訓としての地位を獲得していった。
- (c) ミッションスクールの校訓とするにふさわしい真理契機（要素）が含まれていた。

ご清聴ありがとうございました。

この原稿は、2015年10月24日に西南学院大学博物館で行われた西南学院高校同窓会「輝西会」でのシンポジウムをもとにして紀要に掲載するために改めて執筆を依頼したものである。